

キジル石窟涅槃図にみられる仏教的特質

大 門 浩 子

1. はじめに

西域北道の要所である亀茲（現在のクチャ付近）にあるキジル石窟は、涅槃図やそれに関わる主題の壁画が多数確認されており、亀茲において釈尊の涅槃に対する関心が格別高いことがうかがわれる。涅槃の図像表現は西北インドのガンダーラ美術において初めて認められ、キジル石窟の壁画様式は地理的特質上、ガンダーラ様式との関連が指摘されている。しかしキジル石窟の壁画はガンダーラの影響を受けながらも独自の展開がみられ、キジル石窟で涅槃図が単独で表されるようになった点は注目すべきある。また図像や構成の上でも新たな要素が見出され、亀茲仏教の性質が反映されていたことが想定される。亀茲における仏教はどのような特質を有していたのだろうか、キジル石窟の涅槃図を通して考察していく。

2. 中心柱窟の涅槃説話図と舍利

クチャ地域には石窟群が多く発見されており、キジル石窟はの中で最も規模が大きく成立の早い石窟である。キジル石窟において涅槃図を有する窟は約 50 例確認できる。このうち、29 例はキジル石窟の年代観¹⁾を併せて眺めると最盛期に当たる第 2 様式前期の成立と考えられ、なおかつ中心柱窟と呼ばれる窟形式をとっている。中心柱窟に描かれる涅槃図は窟内の一番奥にあたる後廊奥壁にあらわされる例が主である。涅槃図の周辺には涅槃に関わる説話図²⁾が描かれ、それらは窟内の奥の空間を用いて釈尊の涅槃を表現している。これを宮治昭氏は「涅槃空間」と称し、「後廊の部屋全体を涅槃に関わる図像・モチーフで装飾し、釈迦の涅槃を荘厳する、そのような表現のあり方³⁾」とした。中心柱窟後廊の涅槃図をとりまく周囲の壁画、いわゆる涅槃空間の構成を眺めていくと、これらの傾向が 2 種類に大別できることに気づく。

1 つ目はその周辺の左右廊や後廊前壁に涅槃前後の挿話を描くものである。左

廊、後廊、右廊にかけて涅槃に関わる説話図のおおかたの配置が定型化されている。例として第 224 窟を挙げたい。第 224 窟は主室に因縁や仏伝、仏説法図を描く。中心柱を右繞するように左廊を通ると、右側の左廊内側壁には阿闍世王故事図が描かれる。後廊に入ると奥壁の牀台には涅槃に入った釈尊の塑像が横たわり、涅槃像の対面の後廊前壁には荼毘図と共に悲嘆する民衆が描かれる。右廊を通ると右側の右廊内側壁に舎利の争奪戦と分舎利図、左側の右廊外側壁には第一結集が表されている。これらは概ね説話の時系列に準じて表わされており、観者に対して釈尊の涅槃を一連のストーリーとして表現されている。

これらの中で阿闍世王故事図は注目に値する。阿闍世王故事図はキジル石窟でしか確認されておらず⁴⁾、『説一切有部毘奈耶雜事』第 38 卷に記された説話である。この説話は、釈尊の入滅を阿闍世王が知れば衝撃を受け憤死してしまうだろうと考えた迦葉が一計を案じる、というものである。これは釈尊涅槃の少し後のエピソードだが、涅槃図より手前の左廊内側壁に表される。これは観者が後廊の涅槃空間に入る前にこの壁画をみることとなり、阿闍世王が四相図を以て釈尊の涅槃を知ったのと同様に、観者もこの壁画を見ることによって釈尊の涅槃を予感し、涅槃空間への導入としたのだと考えられる。さらに観者と阿闍世を重ね合わせたのは、観者を在家信者と想定したのではなかろうか。この阿闍世王故事図はキジル独特の中心柱窟涅槃図の構成上興味深い説話図である。

この傾向は、ガンダーラの仏伝図における涅槃図と同様の役割を持っていると考えられる。ガンダーラで確認されている涅槃図は、キジル石窟における涅槃図とは異なり、仏伝図中の一場面として表されていた。ガンダーラにおいて仏伝図は仏塔や奉獻小塔を装飾するのが主であり、仏伝図中の涅槃図は釈尊の生涯の最後の場面であると同時に舎利の説話図の始まりとしての役割を持っていたといえよう。涅槃の後に主役として表されるのは釈尊の舎利であり、その点から涅槃後のエピソードは舎利の説話図としての意味合いが強いと言えるだろう⁵⁾。これらのような舎利の説話図が多く表わされたのはガンダーラの仏伝図の一つの特徴である。キジル石窟における涅槃後のエピソードも、ガンダーラ同様、舎利の説話図を描こうとする意図によるものであろう。しかし亀茲では仏塔を装飾するのではなく、石窟内を涅槃に関わる挿話で荘厳し、視覚・空間を用いて、舎利の説話図を表現した。そのため涅槃空間ともいえる涅槃を重視した壁画構成が成されたのではないだろうか。

2 つ目の傾向は後廊奥壁の涅槃図の周囲を舎利塔や舎利容器で荘厳するもので

ある。第38窟は、主室に因縁図や仏伝図が描かれ、後廊奥壁の涅槃図は横臥する釈尊や双足に礼拝する大迦葉などガンダーラでも見られるような一般的な図像構成がなされている。涅槃図の対面、後廊前壁には塔中に舍利容器を描いた四幡伏鉢舍利塔図が表される。後廊の周辺の壁の下方にも四幡伏鉢舍利塔が一行に並べて描かれ、その中には坐仏または舍利容器が収められている。1つ目の傾向に対してこれらの例は後廊奥壁の涅槃図の周辺に舍利塔や舍利容器を壁画に描くことによって直接的に釈尊の舍利を表現し、後廊内の涅槃空間を成立させている。

3. まとめ

第2様式後期の中心柱窟の涅槃空間の2種の傾向は、それぞれ異なる構成がなされているが、どちらも舍利信仰によるものといえよう。古代亀茲国において舍利への関心が格別高かったことがうかがわれる。

亀茲国の仏教は説一切有部が主流であったとするのが有力である。L. サンダー氏はカニシカ I 世の時代に説一切有部系の僧侶が西域に派遣され、亀茲をホータンの大乗仏教に対抗するような西域の拠点とした可能性を述べた⁶⁾。ガンダーラでは、1, 2世紀頃より舍利塔信仰が流行し、舍利塔・祠堂・寺院が多くたち、在家信者による布施・礼拝を中心とする仏教のかたちが主流になっていた⁷⁾。藤原達也氏はガンダーラにおける根本有部律による寺院運営を、聖遺物堂（仏舍利塔）を中核として「法」（教団・仏寺）と「僧」と「寄進者」との相互依存関係が成されていたとしている。その中で聖遺物堂の寄進を行う檀家に対し、有徳顕彰として寄進者の姿を表わした像や名を記した銘文が刻まれたというのだ⁸⁾。少々強引かもしれないが、L. サンダー氏の説に依り、僧侶が派遣され亀茲に説一切有部を広めたのならば、この藤原氏の言う寺院運営の仕組みも共に亀茲に伝わった可能性があるだろう。キジル石窟には供養者の銘文や、壁画に供養者の像が描かれている例も多数発見されている。亀茲周辺地域の石窟群に描かれた供養者像の例は王侯供養者が最も多く、続いて世俗供養者であり⁹⁾、亀茲において王侯供養者を中心に在家信者が熱心に寄進していたことは明らかである。古代亀茲国で上記の寺院運営が行われていたかの検討は今後の課題とするが、キジル石窟壁画の成立が供養者の寄進によるものであり、それは涅槃図を有する中心柱窟も例外ではなかったと考えてよいだろう。

キジル石窟の涅槃図やそれを取り巻く涅槃空間は、観者に釈尊の舍利を思わせるものであった。これらが供養者の寄進によるものならば、亀茲国において在家

仏教信者の間で舍利信仰が流行していたと考えられるだろう。亀茲国における舍利信仰は、亀茲周辺のスバシ遺跡において6～7世紀の舍利容器が数点発見されている点等も踏まえると大変興味深く、具体的な様相についても考察の必要がある。

- 1) ドイツや中国の諸研究者の様式分類や年代観、科学的調査の結果を考慮し、キジル石窟の涅槃図を有する窟を概略時代順に第1様式、第2様式前期、第2様式後期の3期に分類した。その上で小論では年代の大まかな基準となるようヴァルトシュミットの年代観を採用し、第1様式を500年前後、第2様式前期を600年～650年前後、第2様式後期をそれ以降とする（晁華山「20世紀初頭のドイツ隊によるキジル石窟調査とその後の研究」『中国石窟 キジル石窟』3, 平凡社, 1985, pp.241-249. A. von Le Coq und E. Waldschmidt, *Die buddhistische Spätantike in Mittelasien*, VII (Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, 1975), pp.24-30. 閻文儒「新疆天山以南の石窟」『文物』1962年第7, 8期. 宿白「キジル石窟の形式区分とその年代」『中国石窟 キジル石窟』1, 平凡社, 1983, pp.162-178 参照).
- 2) 涅槃に関わる説話図とは、釈尊が涅槃に入る前後の挿話を主題にした説話図をさす。釈尊の入滅までや、入滅後の葬送場面を表わしたものが主である。
- 3) 宮治昭『涅槃と弥勒の図像学—インドから中央アジアへ—』, 吉川弘文館, 1992, pp.484-485 参照。
- 4) 宮治昭前掲書 p.508 参照。
- 5) ストウーパを装飾する役割を持っていたガンダーラの仏伝図は、ストウーパの中に収められた仏舎利の由来を物語る意味合いもあったと考えられる。そのため仏伝図において釈尊の入滅が最後のシーンでは不十分であり、舍利信仰に関わる説話としての涅槃後のエピソードが表されたのであろう。
- 6) Lore Sander, "Early Prakrit and Sanskrit Manuscript from Xinjiang (Second to Fifth/Sixth Centuries C.E)," in *Buddhism Across Boundaries: The Interplay of Indian, Chinese, and Central Asian Source Materials*, ed. John R. McRae and Jan Nattier (Taipei: Fo Guang Shan Foundation for Buddhist and Culture Education, 1999), pp.36-37.
- 7) 山田明爾「インダス越えて—仏教の中央アジア—」奈良康明・石井公成編『新アジア仏教史 05 中央アジア 文明・文化の交差点』所収, 佼成出版社, 2010, pp.18-19.
- 8) 藤原達也「ガンダーラ「仏伝図」再考—所謂シクリ・ストウーパを主対象に—」『オリエント』Vol. 50, 2007, p.102.
- 9) 中川原育子「クチャ地域の供養者像に関する考察—キジルにおける供養者像の展開を中心に—」『名古屋大学文学部研究論集』哲学 45, 1999, p.90.

〈キーワード〉 キジル石窟, 亀茲, 涅槃図

(立正大学大学院修了)